

目標の共有と、計画と実践の役割分担で、生徒が成長実感を得られる探究学習に

生徒が主体となって探究を深めていくためには、3年間を見通した計画が必要であり、その実現には組織的な推進体制が求められる。ここでは、「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）の実践において重要なポイントとなる「指導計画の立案」「推進体制の整備」「学習評価の工夫」について解説する。

カリキュラム・マネジメントの中核を成す「総合探究」

ベネッセの調査(*)によると、「総合探究」の推進における課題の上位3項目は、「教師間で意識のばらつきがある(他の先生を巻き込むことが難しい)」57%、「探究の年間計画の立て方が分からない」46%、「評価基準を設定することが難しい」46%だった。それらを踏まえ、探究学習の推進のポイントを「指導計画の立案」「推進体制の整備」「学習評価の工夫」とした。「総合探究」は、教科・科目等を横断する学びであり、生徒や学校、地域の実態を踏まえて行われることから、各校のカリキュラム・マネジメントの中核に位置づけられるものである。次のポイントを押さえ、組織的に取り組んでいきたい。

Point 1

指導計画の立案 自校の探究学習の目標を基に指導計画を立案し、取り組みの足並みをそろえる

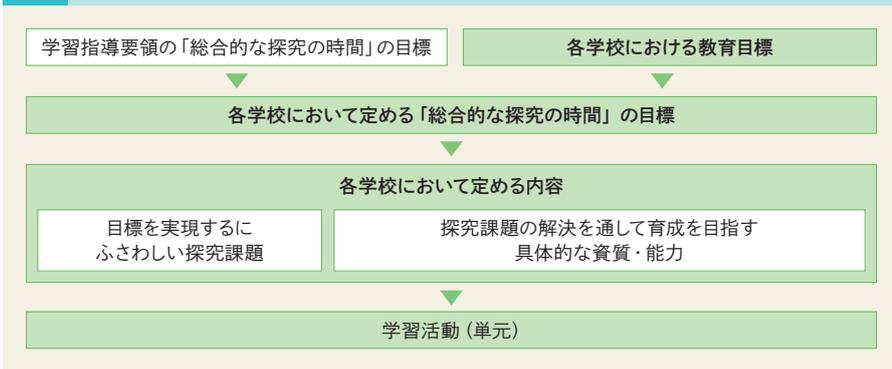
生徒の実態を踏まえた目標を

まずは自校の「総合探究」の目標を、学習指導要領に示された「総合探究」の目標と、自校の学校教育目標を踏まえて設定したい(図1)。

学習指導要領に示された「総合探究」の目標は、「自己の在り方生き方を考え」ながら、「よりよく課題を発見し解決していく」ための資質・能力を育成することだ。その目標や学校教育目標の要素のいずれかを具体化したり、重点化したり、別の要素をつけ加えたりして、自校の目標を設定するとよいだろう。

目標設定で重要なのは、授業を担当する教師間で目標を共有することだ。それができないと、目標を自分なりに解釈してしまい、生徒へのかわり方などに違いが生じやすくなる。担当分掌や授業担当の教師が自分の言葉で、生徒にどんな力をつけてほしいのか、どんな活動をして、どんな支援を行うのかを語れるようになることが望ましい。そのために、管理職や担当分掌が考えた案を授業担当の教師で検討したり、全教師が参加するワークショップを開いたりする学校も少なくない。

図1 目標・内容・学習活動の関係



*文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成

* ベネッセが実施した高校教師向けのオンラインセミナーの参加者がウェブで回答したアンケート調査。実施期間 2018年12月～2019年3月、回答者数 814。

図2 各学年の目標と学習活動例

	1年次	2年次	3年次
目標	探究サイクルを複数回経験し、探究とはどのようなものかを知る	探究を通じて社会とかかわり、自身の学びと進路意識をつなぐ	探究や学校生活での学びと、志望理由を適切に表現する
学習活動	【1学期】探究オリエンテーション／探究スキル（シンキングツール等）／探究プチ体験（2～3コマでの探究体験等）／学校指定のテーマの下で、自身の興味・関心や身近な疑問などから課題を設定／（夏季休業：課題の設定のための読書等）【2学期】課題の設定を中間発表／情報の収集、整理・分析【3学期】まとめ・表現（簡易ポスター発表等）／全体発表会（高2と合同）／振り返り（ポートフォリオ）	【1学期】学部・学科オリエンテーション／ゼミ説明会、ゼミ希望調査／ゼミ内で課題の設定【2学期】情報の収集、整理・分析（高1よりも期間を長く設定し、各自で外部調査等を進める）／探究の進捗状況をゼミ内で中間報告【3学期】まとめ・表現（ポスター発表等）／全体発表会（高1と合同）／振り返り（ポートフォリオ）	【通年】2年次までの探究をさらに深める時間／探究論文作成／志望理由書作成、面接練習等

まずは身近な課題で探究プロセスを体験
「総合探究」の目標が決まったら、指導計画として、3年間を見通した計画と、学年・時期ごとの計画を立案する。前年度中に当年度のおおよその計画を立てておくことが望ましい。特に、3年間を見通した計画は

前年度の実践を踏まえて見直したい。
「3年間を見通した計画」自校の「総合探究」の目標、その実現に適した探究課題、探究学習を通して育成を目指す資質・能力を記し、学習活動・推進体制、評価方法など、基本的な内容を体系的に示したい。

その計画は、具体的には次のように考えてはどうか。低学年では、短期間での探究学習を複数回行い、探究プロセスを体験的に学ぶ。その際、自己の興味・関心や地域といった身近なものをテーマとし、活動のハードルを下げるのがポイントだ。探究学習の進め方に慣れてきたら、校外に出て調査したり、活動を実践したりする。高学年になるにつれ、自身の希望進路にかかわるテーマを、活動期間をより長くして深く探究する。その成果をまとめた論文を作成したり、校外のコンテストなどで発表したりするとよい（図2）。

「学年・時期ごとの計画」生徒がそれまでの学習経験によって、どのように変容するのも想定して、1年間の学習活動を具体的に計画し、時系列に並べていく。

その計画には、活動内容・活動時期・予定時数なども明記する。一緒に生徒個々の具体的な活動を考える

と、計画を立てやすい。活動は、生徒の学習経験と関連づけ、社会との接点を生み出せるよう、季節や地域の行事にも配慮し、各教科・科目との連携も考えて、いつ、何を、どのように行うのかを組み立てたい。

生徒自身の興味・関心から課題を設定

具体的な課題は、生徒が自身の興味・関心を基に設定することが大切だが、テーマもなく自由に課題を設定させようとすると、生徒はどのような課題を設定すればよいか迷い、教師も支援の方向性に戸惑う可能性がある。そこで、テーマを指定しておき、個別の課題は、そのテーマの中で、生徒が自身の興味・関心に基づいて設定することも方法の一つだ。

修学旅行や講演会、オープンキャンパスなど、既存の活動を見直して探究学習に組み込む方法もある。既存の活動であれば、探究学習に対する教師の精神的負担も軽減できる。

自校と既に関係性のある地域や企業、大学等と連携した活動もぜひ検討したい。自校が持つリソースの活用は、学校独自の探究テーマにもつながり、より社会に開かれた学び、フィールドワークなどを可能にする学びを実現できるだろう。

指導計画の立案の第一歩

探究学習のイメージが持てるよう既存の教育活動を軸に据える

東京都・私立田園調布雙葉^{ふたば}中学・高校
小林潤一郎

本校の探究学習の全体の指導計画は、既存の教育活動の中で探究学習との親和性が高そうな沖縄の修学旅行を軸に立てました。新しい活動を軸にすることも検討しましたが、全校で探究学習を推進していくためには、まずは既存の教育活動を活用した方が、カリキュラムや指導計画を作成しやすいのではないかと考えました。

学年会・進路学習指導部・外部組織が連携できるように、全体の指導計画に活動報告や発表の機会を組み込みました。生徒が様々な人からフィードバックを受けて、自分たちの活動を深く振り返ることで、改善点を見だし、具体的な行動に結びつけていたのが印象的でした。

* 同校の実践は、P.11～14を参照。

指導計画の立案のポイント

- ✓ 生徒に身近なテーマで、短期間での探究学習から始める
- ✓ 既存の活動を生かし計画に組み込む

Point 2

推進体制の整備

「総合探究」を計画・推進する組織が、授業を実践する学年団を支援

各学年の経験を全校の財産とする

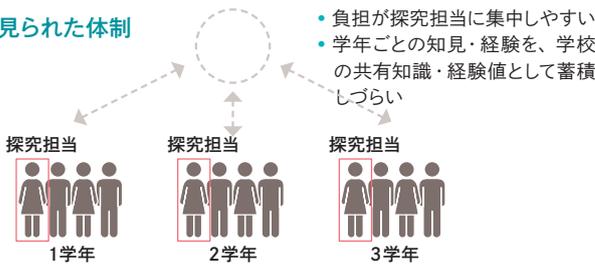
探究学習の指導経験がある教師が少ない場合、学年団が授業を安心して進められるよう支援する「総合探究」専門の組織を設けたい(図3)。例えば、各学年の「総合探究」担当者や、関連分掌の主任などによる委

員会が3年間を見通した計画などを立て、その計画に基づき、各学年団が生徒の状況に応じて授業を行う。

そして、学年団は授業の成果や課題を委員会と共有し、委員会はそれを次年度の計画改善に生かす。そのような専門組織と学年団との役割分担

図3 これから目指したい「総合探究」の推進体制

これまでよく見られた体制



これから目指す体制

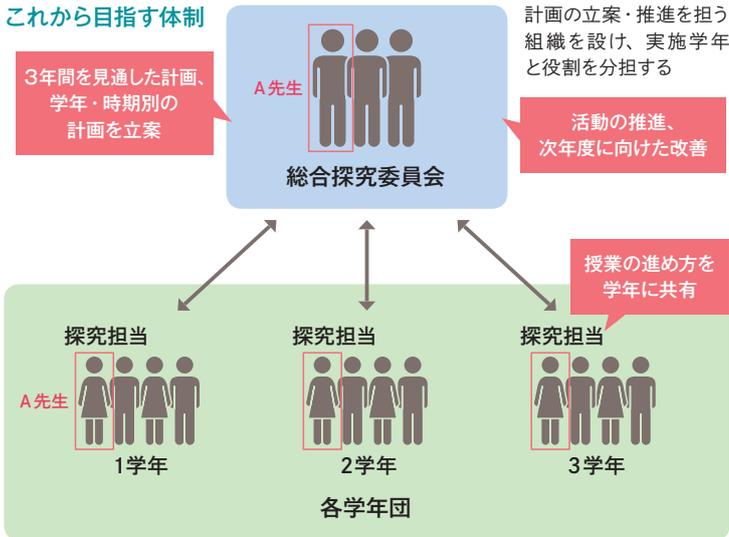
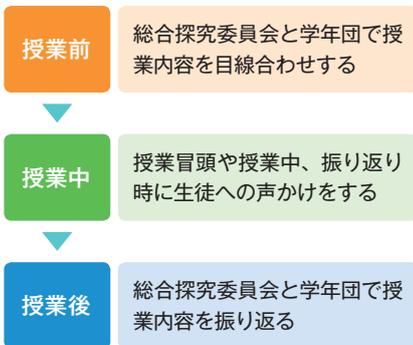


図4 総合探究委員会と学年団のかかわり



によって、各学年の知見や経験を学校全体の財産として蓄積し、特定の教師に過度な負担がかからないようにすることができると期待している。

専門組織が学年団の活動を支援

「総合探究」の授業で特に難しいのは、授業の進行、授業中の生徒への声かけ、授業後の生徒へのフィードバックだ。そこで、専門組織が、授業の展開案や教材を作成し、授業中の声かけやフィードバックの例を示して、学年団を支援したい(図4)。各教師が生徒にどのように声かけやフィードバックをしたかなどを共有する場を設けてもよいだろう。

「総合探究」を初めて担当する教師でも安心して授業を行い、そこで生徒の成長を感じられるような推進体制を築きたい。

推進体制の整備の第一歩

専門組織と学年団の連携で学校全体での推進体制を構築

神奈川県立山北高校
野秋貴浩のあきたかひろ

本校では、探究学習の開始時に専門組織を設け、先進校視察など、活動骨子を定めるための情報収集をしました。担当者を少人数に絞ったおかげで、ノウハウが蓄積しやすく、活動内容も素早く検討できました。本校のように大半の教師に探究学習の指導経験があまりない状態から始める学校は、専門組織の設置から始めるとよいのではないのでしょうか。

一方、専門組織の努力だけでは、探究学習を軌道に乗せることは難しく、学年との連携を密にして学年団の思いを企画に反映しやすく、高学年で見た課題を低学年に共有して計画立案の参考にするなど、学校全体で探究学習が推進しやすい体制を整備しました。

* 同校の実践は、P.15～18を参照。

推進体制の整備のポイント

- ✓ 専門組織と学年団で役割を分担
- ✓ 専門組織は教材や声かけ例などを作成し、学年団の推進を支援

Point
3

学習評価の工夫

多面的な評価材料を基に、
生徒が自ら学びを意味づけられるようにする

何よりも、生徒の成長実感がある評価に

「探究学習に取り組んでも、生徒が成長実感を持っていないようだ」といった声がよく聞かれる。そこで考えたいのは、そもそも生徒が成長を実感できるような学習評価の機会を設けているかということだ。

「総合探究」の学習評価は、生徒の成長のための「診断・測定」としての側面が重要だ。学習指導要領の「総合探究」の解説でも、学習評価は「生徒にどのような資質・能力が身に付いたかを文章で記述すること」とされている。

探究学習では、口頭やポスターなどで学習成果を発表し、その成果物の評価を学習評価とするケースが見られる。しかし、それだけでは評価の結果が表現力などに左右されやすく、生徒の成長を捉えられていないとは言い難い。そこで、学習評価を1つの方法で行うのではなく、複数の方法や評価者による評価を組み合わせ、探究のプロセスや学習活動全

体を通じて培われた資質・能力や態度を評価したい。その結果を生徒にフィードバックし、生徒が自らの学びを意味づけることで、生徒は成長実感を持てるようになるだろう。

生徒が自身の成長を言語化する

プロセス評価の方法には、例えば、活動内容とできたこと・できなかったことの振り返りを授業ごとに記録し、その蓄積を学期の中間や終了時に見返すといった方法がある。自身の試行錯誤や壁を乗り越えた時を思い返ししながら、自分に何が身についたのか、考え方がどのように変化したのかを記述させるとよいだろう。

生徒同士の相互評価も、自らの取り組みをより客観視できる方法として有効だ。ルーブリック(図5)を示し、それを基に相互評価することで、単なる感想だけでなく、探究を磨き上げる視点での評価が期待できる。探究学習全体を通じて培われた資質・能力や態度を確認する方法に

図5 神奈川県立山北高校 1学年「山北について知る」のルーブリック

観点	評価項目	到達度		
		A (素晴らしい!)	B (いいね!)	C (もう少し頑張ろう)
知識・技能	SDGs とのかかわり	SDGs とのかかわりを理解して発表できた。	SDGs とのかかわりを意識して発表できた。	SDGs とのかかわりを意識して発表できなかった。
	探究方法 (調査手法)	信頼できる情報源から情報を集め、調べた情報すべてに対して参考文献を書けている。	調べた情報すべてに対して参考文献を書けている。	調べた情報に対して参考文献を書けていない。
思考・判断・表現力	分析力	調べた情報を、テーマに基づいて説得力が出るように分かりやすく整理できている。	調べた情報を、テーマに基づいて整理できている。	調べた情報でテーマに沿わないものがある。

*神奈川県立山北高校の資料を基に編集部で作成。同校の実践は、P.15~18を参照。

は、客観テストやルーブリック、アンケートなどがある。成果発表会には、他学年の生徒や保護者などが参加すると多様な評価が得られる。教師は指導しようとするのではなく、生徒が1つでも多くの気づきを得られるよう心がけ、生徒自身が主体的に自らの学びを価値づけ、自身の学びを改善できるような評価の仕組みを設計することが大切だ。

学習評価の工夫の第一歩

学びの指針にもなるルーブリックを活用したプロセス評価を重視

東京都・私立広尾学園中学校・高校
木村健太

本校での探究学習の評価は、まずは生徒のための評価を考えたいとの思いから、生徒にとって学びの指針にもなるルーブリックを活用しています。ルーブリックは、いきなり完璧なものを作ろうとはせず、まずは、どんな学びの指針があるかと生徒が本質を捉えられるようになるのかを考えてみるのがよいと思っています。

さらに、成果物での評価だけではなく、プロセスを評価することも重要です。評価には教師の主観が入りやすいですが、本校では、担当教師以外の教師が複数で口頭試問を行い、担当教師の評価とすり合わせて公正性を担保するようにしています。

*同校の実践は、P.3~4を参照。

学習評価の工夫のポイント

- ✓ 成果だけでなくプロセスも評価
- ✓ 生徒が多くの気づきを得られるよう、多面的な評価を行う